

携帯メール依存が青少年に及ぼす影響について

—自己肯定意識・対人依存欲求・社会的スキルとの関係—

On influences of the email by cellular phone upon the younger generation
—Relationship to self-esteem, interpersonal dependence and social skill—

柴田 拓

SHIBATA Taku

(和歌山大学教育学部第60期生)

菅 千索

SUGA Sensaku

(和歌山大学教育学部心理学教室)

現在、青少年の間で携帯電話が急速に普及し、平成22年度の内閣府の調査によると、所有率は小学生で20%、中学生で50%、高校生で97%となっている。携帯電話が我々の日常生活に定着している今日、その存在が青少年にどのような影響を及ぼしているかを明らかにするために、携帯メール依存と自己肯定意識、対人依存欲求、社会的スキルとの関連を検討することが本研究の目的である。被験者は大学生158名(男子71名、女子87名)で、携帯メール依存尺度、自己肯定意識尺度、対人依存欲求尺度、社会的スキル評価尺度(KiSS-18)による調査を行った。そのおもな結果は以下の通りである。①被験者全体について、携帯メール依存と対人依存欲求、被評価意識・対人緊張に正の相関が見られた。②携帯メール依存尺度の脱対人コミュニケーションと自己肯定意識尺度、対人依存欲求尺度、社会的スキル尺度のすべての下位尺度と有意な相関があった。③携帯所有時期が中学生の被験者については、携帯メール依存と対人依存欲求、被評価意識・対人緊張に正の相関が見られた。④携帯電話の機能で最も重要なもの別では、メール機能を重要と考える群は、通話機能を重要と考える群と比べて、携帯メール依存と被評価意識・対人緊張、対人依存欲求で正の相関が強かった。

キーワード：携帯電話、電子メール、青少年、自己肯定意識、対人依存欲求、社会的スキル

問題と目的

現在、青少年の間で、携帯電話が急速に普及し、平成22年度の内閣府の調査によると小学生で20%、中学生で50%、高校生で97%となっている(平成23年2月内閣府発表、平成22年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」結果)。しかし、携帯電話の普及が青少年に与える影響については、研究・議論が十分になされていない。特に携帯電話は1996年に文字サービス、いわゆるメールが出来るようになった。藤竹ら(2001)によると、携帯電話が若年層に普及した理由は、このメール機能が携帯電話に搭載されてからだといわれており、音声通話より携帯メールがよく利用されているという傾向はヨーロッパ、アジアなどでも報告されている(TBSブリタニカ、2001、2002)。このような世界的な流れの中で、携帯電話が青少年の意識や行動、人間関係、社会規範の形成などに及ぼす影響について関心が向けられている(岡田・松田、2002)。実際、最近の中学生や高校生には、携帯メールにおける過剰なコミュニケーションが原因で悩みを抱えている生徒が多いともいわれている。なかには携帯電話なんてなければいいが、持っていなければ友達が出来ないという

生徒もおり、携帯電話が青少年の間で必需品になりつつあるといえる。

携帯電話は確かに便利ではあるが、決して過剰なコミュニケーションのための遊び道具ではない。しかし、現在の青少年は携帯メールで「今、何してる?」「暇なんだけど…」というように、携帯メールを通して友人と過剰にコミュニケーションを取っている。その状況に乗り遅れないために携帯電話を所持している生徒も少なくない。2008年の文部科学省(2009)の調査によると携帯電話を持つ中学2年生の2割は1日に50件以上のメールを送受信しており、高校2年生では4割が携帯からインターネット上にプロフィール(プロフィール)を公開している。メールは「1日10件以上」送受信するという割合が小学6年生で約25%、中学2年生と高校2年生では約6割であった(平成21年2月文部科学省発表、「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」結果)。さらに上別府・杉浦(2002)の研究においても、現在の若年層が携帯メールを使う主目的は友人とのコミュニケーションであることが明らかになっている。

現在、青少年の無気力、自尊感情の低下、親への依存、社会不適応などさまざまな問題が指摘されている。そのような状況が報道されてきたのはここ最近であり、

原因は社会環境の様々な事柄による。森光・関（2004）の研究では、その一つが携帯電話の出現であり、青少年に予想外の大きな影響を与えていることが示唆されている。しかし、電通総研（2007）の調査では、携帯電話の利用台数が既に加入電話の利用台数を超過しており、携帯電話が我々の日常生活に定着している今日、携帯電話を所持しないようにするという方法は現実的ではない。そこで本研究では携帯電話の出現が青少年にどのような影響を及ぼしているかを明らかにし、情報化社会で携帯電話をどのような意識をもって所持すべきか、また使用すべきかについて考えてみたい。

まず、小田切（2008）は国立大学の学生204名に調査を行っている。調査項目は①「ひとりでいられる能力」に関する尺度、②内省傾向に関する尺度・友人関係尺度、③携帯メールに関する項目、④友人数に関する項目の尺度で構成されていた。その報告によれば、孤独からくる不安に対処するために携帯メールを利用しているのだと結論付けられている。さらに小田切・二俣（2008）が大学生53名と専門学校生52名に調査を行っている。調査項目は①「ひとりでいられる能力」に関する尺度、②友人関係尺度、③ふれ合い恐ろしい心性尺度、④携帯電話依存尺度、⑤携帯電話の利用に関する項目の尺度で構成されている。調査の結果、メールの送信数・所属と対人関係関連尺度・携帯電話依存尺度において、メールをよく用いる青年は、他者とのつながりを求めて携帯電話に依存していることが示唆された。またメール利用が少ない青年は、現実の対人関係でも回避的となることも示唆されている。一方メール頻度・所属と対人関係関連尺度・携帯電話依存尺度において、身近な相手によくメールを送る青年は、携帯電話を持っていないことへの不安や強迫観念を強く持っていること、他者とのつながりを強く求めており状況に考慮せず交流を持とうとすることが示唆された。またメル友など非対面の相手によくメールをする青年は携帯を持っていないことへの不安が高いこと、および家族など身近ではあるがそれほど密に交流することはない相手にメールをよく送る青年は他者とのつながりを強く求めていることなどが示唆された。このようにして、現代青年は携帯メールという即時性の強いツールを持つことで、相手とのつながりをすぐに確認しなければいってもたってもいられず、結果ひとりでいても相手とつながっている感覚を保っているのかもしれないと考えられる（小田切・二俣、2008）。

また、足立ら（2003）は大学生197名に質問紙調査を行っている。おもな質問内容は①携帯電話等の所有および使用の実態、②eメールに関する質問、③依存対象に関する質問に分類される。調査の結果、携帯電話とパソコンとの比較では、携帯電話の方が所有率、使用頻度共に高く、携帯電話への親近感の高さが示された。また、対面のコミュニケーションにおいて緊張の強い人には、「しゃべらなくていい」「伝えることがいえる」「考えを整理できる」などeメールが有用なコミュニケーション手段となっていることが示唆された。依

存対象に関しては、「父または母」への依存意識と「親」への携帯メール頻度の間には相関は見られなかったが、「恋人」とは音声通話でも携帯メールでも頻繁にコミュニケーションをとり、依存度も高いことが示された。そして、さらに大学生302名に質問紙調査を行っているが、おもな質問内容は①携帯電話等の所有および使用の実態、②eメールに関する質問、③携帯メール送信に関する質問に分類され、携帯メール使用目的の携帯電話所有者が増加したことが示されている。この2つの調査結果から、大学生にとって携帯電話は単なる情報伝達手段ではなく、最も身近なコミュニケーション・メディアであることが明らかになった。大学生は携帯電話自体を身近なツールと感じており、携帯電話によるコミュニケーションを頻繁に行っている。そのコミュニケーションの相手は心理的に親しみを持ち、かつ依存対象でもある。そして携帯メール相手と普段の依存対象には正の関係があると示されている（足立ら、2003）。

このように青少年にとって携帯メールが、重要なコミュニケーション手段となっていることが分かる。さらに携帯メールの出現が、人格形成に何らかの影響を及ぼす可能性が高いことも予想され、先行研究では携帯メールの使用頻度が現実の対人関係や対人依存欲求に影響を及ぼす可能性が示唆されている。小田切・二俣（2008）は携帯メール依存と他者とのつながりの相関を調べており、またメール相手についての差異も研究している。同様に、足立ら（2003）は携帯メール相手と依存対象についての相関を調べている。

しかしながら本研究では、メール相手などに関係なく、メールの依存度のみ注目することで、携帯メールというものの出現自体が青少年の人格形成に影響を与えたか否かに注目した。そしてメール依存が影響を及ぼす人格的側面としては、自己肯定意識、対人依存欲求、社会的スキルに注目し、つぎのような予想を立てた。

予想1：自己肯定意識、社会的スキルは携帯メールの依存度に伴い低くなり、対人依存欲求は携帯メールの依存度に伴い高くなる。

さらに、携帯電話という新たな対人コミュニケーション手段が増えることは青少年にとって大きな影響を及ぼすが、携帯電話を所持する時期が小学生から大学生というように個人によって大きく異なる。特に成長が著しい小学生から大学生にかけて、携帯電話という新たな対人コミュニケーション手段を持つとなると、どの発達段階で携帯電話を所持したのかという違いで大学時の人格的特徴に大きく変化が現れるのではないかと考えられる。赤坂・坂本（2008）は小学校から高校生までの450名を対象に2時点でのパネル調査を行い、携帯電話の使用が友人関係の深さと密着性に及ぼす影響について検討している。その結果、携帯電話の使用が友人関係の深さに及ぼす影響では、有意な結果

が見られなかった。しかし、密着性に及ぼす影響ではいくつかの変数で有意な効果が見られた。校種別では、高校生では情緒的依存が高いほど密着性が増加し、逆に中学生では情緒的依存が高いほど密着性が低下した。このように、発達段階に応じて携帯電話が与える影響が異なるという結果も得られている。つまり、人格形成に関わる思春期に携帯電話の影響を受けた場合と受けていない場合で、何か差異が生じるのではないかと推測される。しかし、携帯電話が青少年に与える影響に比べると、携帯電話取得時期が青少年の成長にどのような影響を与えるのかを調査した研究は少ない。そこで本研究では、携帯電話取得時期に焦点を当てて、次の予想も立てた。

予想 2：携帯メールの依存度は携帯電話の所持期間に伴い高くなるであろう。

予想 3：携帯メールの依存度が自己肯定意識、対人依存欲求、社会的スキルに与える影響は携帯電話の所持期間に伴い高くなるであろう。

今回の調査では、上の3つの予想を検証することが第一の目的である。また、岡本・江川(2003)は携帯電話について、電話とメールにおける携帯メディア・コミュニケーション観の相違を明らかにするとともに、友人関係態度によって携帯メディア・コミュニケーション観がいかに異なるかを明らかにしている。携帯メディアコミュニケーション観とは、青少年が携帯電話によるコミュニケーションをどのように捉えているかという意識である。彼らは大学生347名に質問紙調査を行っているが、そこでの質問内容は①携帯メディアコミュニケーション観尺度、②友人関係態度尺度の二つで構成されている。その結果、携帯メディア・コミュニケーション観については、各メディア形態に対する評価が異なることが明らかになり、電話とメールそれぞれの利用目的や利用行動が異なる可能性が示された。また、友人関係態度との関連については、親和感情と情報伝達はメール、対人緊張は電話が高く評価され、友人関係態度の違いによって、メディア形態の違いによる影響の程度が異なるというものであった。

同様に、久東・尾崎(2000)は女子大学生129名を対象に質問紙調査を行っているが、質問内容は①携帯電話、電子メールなどパーソナリティメディアの所有・利用状況、②友人とのコミュニケーションの実態、③交友関係意識に関する4件法による40評価項目で構成されている。その結果、音声主体の携帯電話は「情報伝達の」「交友的」両目的で盛んに使用され、文字主体のメールは対象を問わず「交友的」利用が上回っていた。

このように通話機能とメール機能の差異についての研究もなされており、メールの方が交友的によく使用され、また親和感情を形成しやすいということが分かっている。しかし、携帯電話を通話機能目的で所持しているのか、メール機能目的で所持しているのかの

認識の違いが及ぼす影響についての研究はあまりなされていない。足立ら(2003)の先行研究でもみられているように、携帯メール使用目的の携帯電話所有者が増加したことが示唆されている現在の状況下で、この認識が与える影響を調べることは大きな意味があるのではないかと考えられる。そこで本研究では、携帯電話の機能として重要なものは通話機能とメール機能のどちらかという質問によって、携帯電話を通話手段として所持している場合とメール手段として所持している場合で差異が表れるかを検討し、携帯電話に対する認識の違いが青少年に与えている影響を明らかにすることが第二の目的である。

方 法

1. 被験者

国立大学法人教育学部の大学生158名(18歳～24歳)。学年別および男女別の人数はTable 1に示す。

Table 1 被験者の内訳

	1年	2年	3年	4年	合計
男子	15	24	17	15	71
女子	20	28	23	16	87
合計	35	52	40	31	158

2. 質問紙

(1)携帯メール依存尺度

五十嵐ら(2005b)によると携帯メール依存の特徴としては、「メールを打つのが非常に速い」といった「(1)利用スキルの上達」、「何もすることがないとすぐにメールを打つ」といった「(2)暇つぶしの利用」、「一日中メールをする」といった「(3)過剰な利用」、「着信がないと寂しい」といった「(4)情動的な反応」、「相手との対面的なコミュニケーションを回避するためにメールを使う」といった「(5)脱対人コミュニケーション」、「メールだと伝えられることがある」といった「(6)利便性の認知」の6側面が確認されている。これら6つの側面と既存の4つのインターネット依存尺度(Armstrong, Phillips, & Saling, 2000; Caplan, 2002; Morahan-Martin & Schumacher, 2000; Wang, 2001)の項目を参考として、最終的に56項目からなる携帯メール依存尺度が五十嵐ら(2005a)によって作成された。その56項目のうち各因子で因子負荷量が高かった順に9項目ずつ27項目を使用した。それらの27項目のうち、それぞれ9項目が「情動的な反応」、「過剰な利用」、「脱対人コミュニケーション」という下位尺度を構成している。

(2)自己肯定意識尺度

平石(1990a)は青年期における心理学的健康を問題について、彼らの自己意識に存在する健康-不健康、対他者-対自己という2つの軸から分析している。さらに平石(1990b)は、青年期における自己意識の発達を、自己肯定性次元と自己安定性次元の2点から検討

している。本尺度は、このうちの自己肯定性次元の個人差を、対自己領域と対他者領域の2つに分けて測定するもので、それぞれが3つの下位尺度から構成されている。対自己領域の下位尺度は、「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」、対他者領域の下位尺度は「自己閉鎖性・人間不信」「自己表明・対人的積極性」「被評価意識・対人緊張」である。

(3)対人依存欲求尺度

竹澤・小玉(2004)によって作成された大学生の対人依存欲求を測定する尺度である。本尺度は依存欲求を「是認、支持、助力、保証などの源泉として他人を利用しないし頼りにしたいという欲求」と定義し、「情緒的依存欲求」「道具的依存欲求」という2つの依存欲求からなる。

(4)KiSS-18

社会的スキルを身につけている程度を測定する。社会的スキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル」と定義される(菊池,1998)。Goldstein *et. al.* (1986)は、若者にとって必要な社会的スキルを大きく6種類に分類した。この分類に基づいてGoldstein *et. al.*が作成したスキルのリストをもとに菊池(1988)が作成したものである。

3. 手続き：集団式により、最初に研究への協力依頼およびプライバシー関連等の一般的な説明を行った後、フェイスシート、携帯メール依存尺度、自己肯定意識

尺度、対人依存欲求尺度、KiSS-18が印刷された冊子を配布した。フェイスシートでは、学年、性別、年齢、クラブ・サークルの所属、住居、同性と異性のきょうだいの有無、携帯電話を使い始めた時期、携帯電話の機能で最も重要なものを書き込めるようにした。冊子は尺度が4種類あったためにカウンターバランスがとれるよう尺度の順を入れ替え、4種類の冊子を均等に配布した。そしてそれぞれに質問紙への回答に関する教示や注意事項をまとめて述べたうえで回答させた。時間制限は課さなかったが、実際の所要時間はおよそ10分から20分程度であった。

結果と考察

携帯メール依存尺度と自己肯定意識尺度、対人依存欲求尺度、社会的スキル尺度との相関係数を、全体および取得時期別(小学、中学、高校、大学)、携帯電話で重視する機能別(通話、メール)、男女別(男、女)、に求めた。その結果をTable 2に示す。

被験者全体について：携帯メール依存尺度と自己肯定意識尺度、対人依存欲求尺度、社会的スキル尺度の相関について被験者全体でみた場合、携帯メール依存尺度のすべての下位尺度(情動的反応、過剰な利用、脱対人コミュニケーション)は被評価意識・対人緊張、情緒的依存欲求、道具的依存欲求と有意な正の相関が

Table 2 携帯メール依存と自己肯定意識・対人依存欲求・社会的スキルとの相関係数

分析対象	N	測定変数	自己受容	自己実現度	充実感	自己閉鎖性・人間不信	自己表明・対人的積極性	被評価意識・対人緊張	情緒的依存欲求	道具的依存欲求	社会的スキル
全体	158	携帯情動的反応	-0.25**	-0.04	-0.17*	0.15	-0.08	0.41**	0.49**	0.36**	-0.15
		携帯過剰な利用	-0.08	-0.05	0.01	-0.03	0.15	0.18*	0.37**	0.21**	0.09
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.26**	-0.27**	-0.23**	0.22**	-0.24**	0.27**	0.25**	0.22**	-0.26**
小学	13	携帯情動的反応	0.02	0.53	0.06	0.19	-0.13	0.51	0.37	-0.08	0.09
		携帯過剰な利用	0.27	-0.03	-0.09	-0.32	0.48	-0.11	0.21	-0.06	0.03
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.19	0.21	-0.09	0.34	-0.42	0.31	0.19	0.00	-0.51
取得 中学	64	携帯情動的反応	-0.16	0.02	-0.01	0.01	0.08	0.45**	0.60**	0.42**	-0.07
		携帯過剰な利用	-0.05	-0.07	0.06	0.03	0.14	0.29*	0.34**	0.39**	0.12
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.17	-0.37**	-0.22	0.22	-0.12	0.43**	0.47**	0.40**	-0.12
時期 高校	76	携帯情動的反応	-0.40**	-0.18	-0.33**	0.27*	-0.24*	0.38**	0.37**	0.37**	-0.24*
		携帯過剰な利用	-0.21	-0.09	0.00	-0.08	0.08	0.12	0.42**	0.13	0.06
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.35**	-0.27*	-0.26*	0.23*	-0.33**	0.14	0.05	0.10	-0.35**
大学	5	携帯情動的反応	-0.03	0.20	0.05	0.24	0.06	0.96*	0.63	-0.11	-0.24
		携帯過剰な利用	-0.02	-0.06	0.11	-0.08	0.45	0.85	0.66	0.47	-0.16
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.18	-0.24	-0.03	-0.01	0.66	0.61	0.64	0.16	0.13
機能 通話	42	携帯情動的反応	-0.43**	0.03	-0.16	0.30	-0.22	0.26	0.58**	0.49**	-0.14
		携帯過剰な利用	0.11	0.11	0.08	0.04	-0.04	0.08	0.31	0.29	-0.05
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.10	-0.12	-0.34	0.42**	-0.50**	0.09	0.15	0.07	-0.45**
メール	76	携帯情動的反応	-0.16	-0.02	-0.15	0.07	0.02	0.45**	0.45**	0.28**	-0.11
		携帯過剰な利用	-0.12	-0.10	-0.02	-0.07	0.26**	0.22*	0.38**	0.17	0.19
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.25**	-0.26**	-0.16	0.11	-0.06	0.31**	0.27**	0.24**	-0.12
性別 男	71	携帯情動的反応	-0.34**	-0.04	-0.22	0.24*	-0.25*	0.40**	0.50**	0.45**	-0.31**
		携帯過剰な利用	-0.14	-0.14	0.01	0.05	-0.01	0.21	0.23	0.23	0.08
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.33**	-0.27*	-0.26*	0.37**	-0.48**	0.26*	0.20	0.28*	-0.35**
別 女	87	携帯情動的反応	-0.19	-0.08	-0.12	0.05	0.06	0.42**	0.56**	0.29**	0.00
		携帯過剰な利用	-0.02	0.04	0.01	-0.10	0.31**	0.17	0.50**	0.19	0.11
		携帯脱対人コミュニケーション	-0.22	-0.30**	-0.20	0.06	-0.02	0.27*	0.37**	0.18	-0.20

注：有意確率は ** : $p < 0.01$ 、* : $p < 0.05$

見られた。このことから、携帯メールに依存している人は、被評価意識・対人緊張、情緒的依存欲求、道具的依存欲求が高いということが分かる。これは予想1の一部を支持するものであり、携帯メールへの依存には情緒的依存欲求、道具的依存欲求が反映されていると考えられる。また、被評価意識・対人緊張との正の相関が高いということは、携帯メール依存になると、実際の人物と直接会って話す機会が少なくなり、人と直接会って話すことに抵抗や緊張を感じやすくなるということを示唆している。しかし予想1と異なる点は、情動的反応と過剰な利用について、被評価意識・対人緊張、情緒的依存欲求、道具的依存欲求を除けば、情動的反応が自己受容と充実感に有意な相関が見られるのみであり、その他に有意な相関がなかったことである。つまり、携帯メールの情動的反応の高さや過剰な利用は、自己肯定意識尺度の被評価意識・対人緊張以外、社会的スキルとは関係が認められなかったことになる。一方、脱対人コミュニケーションとの相関を見ると自己肯定意識尺度、対人依存欲求尺度、社会的スキル尺度のすべての下位尺度と有意な相関があった。これは予想1を大いに支持するものであり、携帯メールはコミュニケーションを取るうえで重要な手段だと考えている人は自己肯定意識が低く、対人依存欲求が高く、社会的スキルが低いということが分かる。携帯電話を重要なコミュニケーションの手段と捉え、仲のいい友人などと過剰にコミュニケーションを取ることで依存心が高まり、他人と直接話す機会が減ることで社会的スキルが低くなるのではないかと考えられる。また、伝える必要のないマイナスな事柄までもメールで伝えることによって、自己肯定意識の低下につながっていくのではないとも考えられる。携帯電話は過剰にコミュニケーションを友人と取るための道具ではないという認識が今後より一層大切になってくるであろう。

携帯取得時期ごとに見られた特徴：それに対して、携帯取得時期別で見ると、小学生では相関が有意であるものはまったくなかった。同様に大学生でも相関が有意で見られたのは被評価意識・対人緊張のみであった。これは携帯取得時期を小学生とした被験者が13名、大学生とした被験者が5名と少なかったことが原因であるとも考えられる。よって今回は携帯取得時期が中学生と高校生で比較してみる。中学生で見た場合、携帯メール依存尺度のすべての下位尺度（情動的反応、過剰な利用、脱対人コミュニケーション）は被評価意識・対人緊張、情緒的依存欲求、道具的依存欲求と有意な正の相関が見られた。これは全体での結果と同じであるが、より高い正の相関であった。しかし全体とは異なり、そのほかで有意な相関が見られたのは、脱対人コミュニケーションと自己実現的態度における負の相関のみであった。杉浦（2000）は中学生では拒否不安と親和傾向が未分化であり、親しい関係を維持したいと思うと、必然的に拒否不安も強くなってしまうのだと指摘している。つまり中学生のうちに携帯電話

を取得すると、拒否不安から親和確認することで携帯メール依存になってしまい、対人依存との関連が強くなることが考えられる。一方、高校生では、情動的反応と脱対人コミュニケーションが自己受容、充実感、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、社会的スキル尺度とそれぞれ有意な相関があり、また情動的反応は被評価意識・対人緊張、情緒的依存欲求、道具的依存欲求とも有意な正の相関が見られた。さらに過剰な利用も情緒的依存欲求と有意な相関が見られた。これらことから中学生の頃に携帯電話を所持した被験者は、携帯メール依存になると被評価意識・対人緊張や対人依存欲求に大きく影響を及ぼしていることが分かる。一方、高校生の頃に携帯電話を所持した被験者は、携帯メール依存になると被評価意識・対人緊張や対人依存欲求に加え、自己受容、充実感、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、社会的スキルと多様なものに影響を及ぼしていることが分かる。これは予想3に反することであり、携帯所持時期が早いほど携帯メールの依存が与える悪い影響が多いという訳ではなく、発達段階に応じて影響を与えるものが異なっていると判断される。しかし、所得時期が中学時においても高校時においても、携帯メールに依存することが人格形成に大きくマイナスの影響を与える可能性があり、若年層の携帯メールの正しい使用が求められる。またこの結果は、中学生時代に被評価意識・対人緊張や対人依存欲求が発達し、高校生時代に自己受容、充実感、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、社会的スキルが発達していくという可能性を示唆しているとともに、中学生の携帯メールの使用法・認識と高校生の携帯メールの使用法・認識が異なり、それぞれがメール依存と人格形成を関連付ける異なった特徴を持っていることを示唆しているものであろう。更に詳しく研究していくためには、携帯所得時期が小学生および大学生のデータもたくさん収集するとともに、各発達段階での携帯メールの使用法・認識を分析することが今後の課題である。

携帯電話で重視する機能別で見られた特徴：また、携帯電話で重視する機能別では、通話機能がより重要な被験者では、情動的反応と自己受容、対人依存欲求において有意な相関があった。また、脱対人コミュニケーションと自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、社会的スキル尺度にそれぞれ有意な相関があった。一方、メール機能がより重要な被験者では、脱対人コミュニケーションと自己受容、自己実現的態度に有意な相関があった。また、過剰な利用と自己表明・対人的積極性にも有意な相関があった。さらに、携帯メール依存尺度のすべての下位尺度（情動的反応、過剰な利用、脱対人コミュニケーション）と被評価意識・対人緊張、情緒的依存欲求、情動的反応と脱対人コミュニケーションが道具的依存欲求に有意な相関があった。このことから、メール機能を重要と考える人は、通話機能を重要と考える人と比べて一層、携帯メールの依存が被評価意識・対人緊張、対人依存欲求から

生じていることが分かる。つまり携帯メールは相手の状況に関わらずいつでもメールを送れ、実際に会話しなくても意思伝達出来るところにメリットを感じているのであろう。さらに今回の研究で通話機能がより重要といった被験者は42名であるのに比べて、メール機能がより重要といった被験者は116名であった。この現状からも携帯メールの出現が、若者が人前に出ることを嫌い、新しい環境での人間関係になじめない、また、一人では何もできないといったような現状を作りだしている要因の一つではないかと考えられる。

男女間でみられた特徴：性別でみた場合、男性については、情動的反応と脱対人コミュニケーションが自己受容、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、被評価意識・対人緊張、道具的依存欲求、社会的スキル尺度とそれぞれ有意な相関があった。また、情動的反応と情緒的依存欲求、脱対人コミュニケーションと自己実現的態度、充実感にも有意な相関があった。しかし過剰な利用はどの尺度とも有意な相関はまったく見られなかった。一方、女性については、携帯メール依存尺度のすべての下位尺度（情動的反応、過剰な利用、脱対人コミュニケーション）と情緒的依存欲求に有意な相関があった。また、情動的反応と被評価意識・対人緊張、道具的依存欲求、過剰な利用と自己表明・対人的積極性、脱対人コミュニケーションと自己実現的態度、被評価意識・対人緊張にも有意な相関があった。これは男性が携帯メールに対して情動的反応が高くなったり、携帯メールを重要なコミュニケーションの手段と捉えだした場合に、自己肯定意識の低下や対人依存欲求の増加、社会的スキルの低下につながっていく傾向が非常に強いことを示唆している。また、男性については携帯メールの過剰な利用は自己肯定意識の低下や対人依存欲求の増加、社会的スキルの低下に影響を及ぼさないと見える。一方、女性は情緒的依存欲求が高ければ携帯メール依存になる傾向が強いということになる。男女を比較すると、男性は比較的多様な原因から携帯メール依存になる可能性があるが、女性は情緒的依存欲求が原因で携帯メール依存になりやすいという違いが認められるであろう。

まとめ

本研究では大学生158名を対象に、携帯メール依存尺度、自己肯定意識尺度、対人依存欲求尺度、社会的スキル尺度を実施し、携帯メール依存と自己肯定意識、対人依存欲求、社会的スキルとの関連について検討した。そのおもな結果は以下の通りである。

①被験者全体について、携帯メール依存と対人依存欲求、被評価意識・対人緊張に正の相関が見られた。また、②携帯メール依存尺度の脱対人コミュニケーションと自己肯定意識尺度、対人依存欲求尺度、社会的スキル尺度のすべての下位尺度と有意な相関があった。③携帯所有時期が中学生の被験者については、対人依存欲求、被評価意識・対人緊張に正の相関が見ら

れた。一方、携帯所有時期が高校生 of 被験者については、被評価意識・対人緊張や対人依存欲求に加え、自己受容、充実感、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、社会的スキルでも有意な相関が見られた。④携帯電話の機能で最も重要なもの別では、メール機能を重要と考える人は、通話機能を重要と考える人と比べて一層、携帯メール依存と被評価意識・対人緊張、対人依存欲求に正の相関があった。

本研究では、携帯メールを過剰にコミュニケーションを友人と取るための一種の遊び道具と捉え、携帯メールがなければ友人と友好的な関係を築けないと考えている場合において、携帯電話が人格形成と何らかの関連をもつと判断された。一方、携帯メールの利用数については、あまり人格形成に関与しないという結果となっている。また、携帯電話の機能では携帯メールが重要という認識が、自己肯定意識に影響を与えることも明らかになった。近年に見られるように若者が人前に出ることを嫌い、新しい環境での人間関係になじめない、また、一人では何もできないといったような現状は携帯メールの出現が影響を与えている可能性が高いとも考えられるのである。携帯電話は過剰にコミュニケーションを友人と取るための道具ではないという認識が今後より一層大切になってくるであろう。最近ますますメディア・コミュニケーションの進歩がめざましいので、この問題は早急に検討しなければならない。今後は大学生だけではなく、中学生や高校生からもデータを集め、学校側と協力して生徒たちもこの現状と一緒に考えることで、よりよいメディア・コミュニケーションの進歩の道を拓くことが出来ると考えられる。

引用文献

- 足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄 2003 携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係, 教育学科研究年報, 29, 7-14.
- 赤坂瑠以・坂本章 2008 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響: パネル調査による因果関係の推定, パーソナリティ研究, 16(3), 363-377.
- Armstrong, L., Phillips, J. G., & Saling, L. L. 2000 Potential determinants of heavier Internet usage. *International Journal of Human-Computer Studies*, 53, 537-550.
- Caplan, S. E. 2002 Problematic Internet use and psychosocial well-being: development of a theory-based cognitive-behavioral measurement instrument, *Computers in Human Behavior*, 18, 553-575.
- 電通総研編 2007 情報メディア白書, ダイアモンド社.
- 藤竹 暁・水越 伸・松田美佐・川浦康至 2001 座談会「携帯電話と社会生活」, 現代のエスプリ, 405, 至文堂.
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. 1986 *The adolescent: social skill training through structured learning*. In Cartledge, G., & Milburn, J. F. (Eds.), *Teaching Social Skills to Chil-*

- dren, Pergamon Press.
- 平石賢二 1990a 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康, 教育心理学研究, **38**(3), 320-329.
- 平石賢二 1990b 青年期における自己意識の発達に関する研究: 自己肯定性次元と自己安定性次元についての検討, 日本教育心理学会総会発表論文集, 265-266.
- 五十嵐祐・元吉忠寛・高井次郎・吉田俊和 2005a 携帯メール依存に関する研究 (1)—携帯メール依存尺度の作成—, 日本グループ・ダイナミクス学会発表論文集, 126-127.
- 五十嵐祐・元吉忠寛・高井次郎・吉田俊和 2005b 携帯メール依存に関する研究(2)—携帯メール依存と利用実態—, 日本グループ・ダイナミクス学会発表論文集, 128-129.
- 上別府圭子・杉浦仁美 2002 携帯eメールが思春期の対人関係に及ぼす影響—首都圏5公立中学校における実態把握—, 安田生命社会事業団研究助成論文集, **38**, 48-57.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する, 川島書店.
- 久東光代・尾崎かほる 2000 パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(4)—携帯電話・電子メールの利用目的との関連— 日本教育心理学会総会発表論文集, 155
- 文部科学省 2009 「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」結果, 平成21年2月発表.
- Morahan-Martin, J., & Schumacher, P. 2000 Incidence and correlates of pathological Internet use among collegestudents, *Computers in Human Behavior*, **16**, 13-19.
- 森光義昭・関 聡 2004 情報化社会の現状と課題, 久留米信愛女学院短期大学研究紀要, **27**, 45-56.
- 内閣府 2010 平成22年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」結果, 平成23年2月発表.
- 小田切亮 2008 携帯メールに見る現代若者の孤独感に関する研究, 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 210-211.
- 小田切亮・二俣詩織 2008 携帯メールにみる現代青年の対人関係及び携帯電話依存に関する研究, 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 54-55.
- 岡田朋之・松田美佐 2002 ケータイ学入門—メディアコミュニケーションから読み解く現代社会, 有斐閣.
- 岡本 香・江川朋幸 2003 携帯メディアコミュニケーションと大学生の友人関係態度との関連, 日本教育工学雑誌, **27**, 137-140.
- 杉浦 健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係: その発達的变化, 教育心理学研究, **48**(3), 352-360.
- 竹澤みどり・小玉正博 2004 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討, 教育心理学研究, **52**(3), 310-319.
- TBSブリタニカ 2001 Newsweek日本版, 2001/4/25号, 58-59.
- TBSブリタニカ 2002 Newsweek日本版, 2002/1/16号, 54-55.
- Wang, W. 2001 Internet dependency and psychosocial maturity among college students, *Human-Computer Studies*, **55**, 919-938.